

## 健康万歳 ②

### 重粒子線がん治療

新幹線「新鳥栖駅」前に新名所が出来た。「九州国際重粒子線がん治療センター」（サガ・ハイマツト）である。この種の施設は今まで日本で3ヶ所あり、がん治療に成果を収めてきた。

今回鳥栖市に開設されたことは、当圏域のがん治療が身近に感じられるようになり大変喜ばしいことである。

平均寿命の延びに伴い、がんは急速に増えた。死亡率も凡そ3人に1人という恐ろしい疾患である。しかも従来行われてきた

早期発見により手術、放射線治療、制癌剤と一定の治療方針が必ずしも万全とは言えず、特に副作用が患者さんの生命をも脅かすケースが多く聞かれている。

メンタルの面でも殆ど「死の宣告」を受けるに等しく、本人は勿論、家族も余命3ヶ月に怯えてきた。

重粒子線がん治療は放射線治療の1つであるが、従来行われて来た放射線治療とは違い、がん病巣にピンポイントで放射線を出し、周囲の正常細胞を損傷しない利点がある。その上1回の照射時間も短く日帰り治療も可能と聞

くと従来の治療と比べ昔日の感じがする。

特に脳腫瘍や肺、肝臓、子宮、前立腺など発生頻度の高い部位の固形がんや切除不能な骨肉腫に効果が期待されている。

しかしこのように優れた治療も先進医療であるため、かなり高額の自己負担が必要であり、今の処は簡単に受療出来ない。

今後、公的医療保険の適用を受けるようになるのと、当然利用範囲は広がるものと思われる。長生きしているとまだまだ医療の恩恵は受けられそう

だ。

林 榮一

(医師・八女市立花町)

## 街かど gallery



八女市本村  
牛島 厚



私が絵画を始めた出会い、おりなす八女で開催された、文化祭の作品展を家族と一緒に見に出かけた時の事でした。特に絵画の展示を見て、自分も絵を描いて見たいなと思いました。家族の後押しもあり、思いきって絵画教室への入会を申し込み、早くも二年余りたちました。初心者私を、田代喜玖生先生から丁寧に基礎からの指導を頂き、又諸先輩方のアドバイスをお聞きしながら学習しています。まだ「イロハ」のイロを勉強の途中で、早く「ニホヘト」と進んで行けたら良いなあと

思っている所です。未熟ですがこの絵は日田方面に小旅行した時、三隈川のほとりを描いたものです。これから余暇を楽しみながら、絵画を続けて行きたいと思っています。

## ご協力ありがとうございました

ヤンマー建機杯第17回矢部川交流軟式野球大会はみやま、柳川、八女、筑後四市立中学校野球部26チームが参加して開催されました。各チームの選手は日ごろの練習の成果を存分に発揮し好ゲームの連続でした。試合結果は優勝高田中学校（みやま市）準優勝八女学院中学校（八女市）でした。全力で戦ってくれた全選手の皆さん、大会開催にご尽力賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。

大会委員長  
木本 文明



大型自二のライセンスを取り、HDを購入した。HDの開放的で自由な姿に憧れ、九州各地で行われるミーティングにもよく行った。日本全国から鉄馬HDに、跨りや



気が付けば、猛スピードでたぐり寄せるアスファルトとゆっくり流れる山なみを見ていた。路面からの入力とエンジンの鼓動を体で感じながらアクセルを握っている。つづら折りの峠道を膝小僧を路面にすりながら「スピードに魅せられ走り抜ける。その時、一陣の風となる。」そんな無茶な時期もあった。

つて来る同志達とリアルな時間を共有。ツーリングは世代・年齢の垣根を越えて楽しめる趣味であり、40以上も年の離れた老騎士たちと走った。「上手なライダーは、スピードではなく無事故で走り続けられる人だよ」とは、老騎士たちの言葉。長年走り続けると地元のエンスージアスト達とも交流ができる。Vツインサウンドを轟かせ隊列を組む、交通安全パトロール。俗にいう「制服組」のメンバーとの走行会。バイクイコール不良というマインスイメージも健全な趣味として認知されてきた。制服組の先輩たちの努力の賜物だ。

結婚し、子供を授かり、バイクに乗る機会も少なくなった。しかし家族とのドライブでハンドルの向く方向は、バイクで走った道が多い。将来また本格的に乗る時が来たら、その時は入道雲の下で会おう。

鶴 貴朗

(八女市本町)

## 恋文

今は誰も住まぬ、私の生家の大掃除をした時のことである。天袋から後生大事に風呂敷に包まれた、大量の手紙が出てきた。見覚えのある筆跡、心覚えのある思い出、「ああ、やばい」、背後には「何だそれは」と夫が立

っている。今から三十五年前、十八だった私が交際していた男性からの、百通に及ぶまさしく恋文だった。ラブレターとは呼ばない。高鳴る胸と紅

## 矢部川と千間土居 ③ 今なお健在 先人が築き上げた矢部川の千間土居

この千間土居は築堤後318年経過した今でも当時の面影を残すのみか、昨年の筑後地域を襲った未曾有の大水害でも決壊しないで見事に治水の役割を果たし、先人の知恵と突貫工事に当たった人々の苦労が強く忍ばれた出来事でもあった。

なお、筑後地域は竹との関係が深く、例えばタケノコ生産日本一位の中心地、提灯生産量は岐阜県、愛知県と並ぶ三大生産地、世界でも八女にだけ分布するカシロタケ（雪駄・馬連の材料）など多様な産業や竹種が見られるなど竹との関わりが深い。護岸工事に竹を植栽したのも竹に対する知識が豊富であったと想像される。ちなみに竹林内の地下茎は網目状に広がり、1反（10a）当たりの総延長はモウソウチク林で約2,500～11,000m、マダケ林では6,300～18,000m、更に小径竹のハチク林では14,000～18,000m、笹類に至っては47,000～57,000mとも言われ、これが堤防を強靱に保護し、

“地震の時は竹藪に逃げよ”とも言われ、また、竹は一度植栽すれば補植しなくても新たな竹を発生させるので永久的に生育する特性を持っている。上木として植栽されているクスノキは、八女地方の温暖気候に合致し長寿命の特性を持っていることなど先人の知恵が木と竹による二段林の土手を築きあげた事に感心させられる。

野中 重之（広川町）

参考文献 ①矢部川の歴史/辻本喜統/1992②河川文化を語る15 吹春 茂/2001③全国竹の大会/青木輝洋/1978



地下茎でネット状に張り巡らされた地中内

潮する頬を直隠し、何とかその場を取り繕ってその恋文の束は、燃えるゴミ専用の袋へ。思いがけない青春のフラッシュバックが恥ずかしく、また嬉しかった。

歌人尾崎左永子の著書に『源氏の恋文』がある。千年を経た現代に大切に読み継がれている『源氏物語』。その中にある多くの恋文に焦点を当て、雅びの凝縮された世界が広がっている。「ありやなしや」という、人の安否や消息を問うことの儘ならなかった時代だからこそ、綴る言葉も恋文も大切にされた。家族全員が携帯電話を持ち、電子メールの飛び交う現代。わが家の固定電話も減多に鳴ることはない。例えば恋人同志の別れ話にしても、電話一本、メールひとつで済むという。千年前と今、果たしてどちらが豊かな世界だろう。夫と結婚する前の三年間、交換日記をしていた。アナログなふたりの世界、次に会うまでの時間の余白が、愛を育んだ。

蓉子